

F1-9

## “Die neue Stadt” の再検討

刈田喜一郎訳による「新都市の建設」に基づく考察

Reexamination of “Die neue Stadt”

Consideration based on “Construction of New City” by Kiichiro Karita

○宇於崎勝也<sup>1</sup>, 赤澤加奈子<sup>1</sup>

Katsuya Uozaki<sup>1</sup> and Kanako Akazawa<sup>1</sup>

Abstract: "Die neue Stadt(1939)" is assumed that it proposed 'the model city of 20,000 people' based on the investigation of actual conditions of 72 cities as a result of comparing between cities. However, a necessary industrial scale, the area and the number of employees were led from the analysis of the industrial composition of 72 cities of 20,000 people according to "Construction of a New City" by Kiichiro Karita.

### 1. 研究目的

“Die neue Stadt (1939)” は都市計画の教科書などで紹介される場合、ナチス政権下で 72 都市の実態調査をもとに都市間比較を行った結果から人口 2 万人のモデル都市を提案したとされている<sup>注1)</sup>。しかし、今回笠原敏郎文庫<sup>注2)</sup>の中から 1942 年 5 月発行の「新都市の建設」<sup>注3)</sup>が発見され（以下、本書という）、本書は“Die neue Stadt”の全 2 篇のうちの第 1 篇を翻訳したものであることがわかった。そこで、その読解を進めたところ、従来の教科書的内容は主として第 2 篇にあたること、第 1 篇ではドイツの諸都市の特徴を抽出し、都市<sup>注4)</sup>の分類を行い、人口 2 万人の都市に必要な土地利用を導き出すための詳細な分析結果であることが明らかとなった。そこで本稿では本書の概要を示し、これまでとはやや異なる“Die neue Stadt”の紹介を試みる。

### 2. 概要

本書ではまず「理想的都市大は人口 20,000 を有する都市である。長い周到な調査と熟考とを経てわれわれはこの都市大をこの報告の根拠とした」と述べている。

当時のドイツは人口が急増し、地方でジードルンク（定住圏・入植地）の建設を積極的に行ったが、それ以上に大都市の膨張が激しく、良好な結果が得られていなかった。そこで、本書は「大都市の弊害」「村落の弊害」「小都市において大都市と村落との弊害は融和される」「大都市の利益」「村落の利益」「大都市と村落との利益の多くは小都市において首尾よく結合される」という分析を進め、「以上述べた諸根拠から現存小都市の機構を研究するに努めてきた。しかもその際民族政策的に見て、大約 20,000 の住民を有する地方都市が最

も健全な生活条件を指示しているという結果に立ち至った」としている。

さらに、「調査の方法」として、「場所的制限は人が種々の変貌の中から確実に主導因を規定するということの不可能なほどに強く優勢である。比較的多数にのぼる比較対象物において始めて（ここには 15,000～25,000 を有する 120 都市のことごとくについて余すところなくなされている）このことは可能である」として、実際には人口 20,000±5,000 の 120 都市をまず調査していることがわかる。

それらの都市を個別に確認し、生活圏の大きさ、市場の影響範囲、市場の形成状況などを整理し、人口密度や行政圏との兼ね合いから、どの程度の土地利用の面積が必要かを検討している。一方で、施設としての道路、住宅の配分（様式・数・量）などの推定から土地利用区分を検討している。

### 3. 「都市型」

現況調査にもとづき、どのような産業がそれぞれの都市で盛んであるかを比較し、「都市型」として分類をしている。第 4 章の冒頭で、「都市を計画通りに企画するには、同時にそれらの経済的総合体制をもあわせて熟慮しないでは到底不可能である。それゆえ最初に都市の一般的経済性格についての映像が作成されなければならない。ここでは人口 20,000 級の 72 都市について詳細な調査を試みることにする。都市の経済的類型を認識する最善の方法は生業を経済部門に配分することにある」と記述し、これ以降でようやく 72 都市に限定した詳細な調査結果の説明に移る。

Table1. は都市類型を行うための基準となる職業を示

1 : 日大理工・教員・建築 CST Nihon Univ.

し、それらが6つの経済部門(型)<sup>注5)</sup>のどこに属するかを分類している。その結果からは、工業及び手工業(I)に従事する人数が平均39.9%で最も多く、無職業生計者(B)20.6%、交通業・商業(V)18.6%、公務(O)11.2%、農林漁業(L)に従事しながら都市に居住する者は4.9%と少なく、家事(H)も4.8%となっている。72都市の平均とドイツ全体の平均を比べると農林漁業(L)を除いて、経済部門の配分率は(I)34.0%、(B)15.0%、(V)15.6%、(O)7.6%、(L)24.5%、(H)3.3%と72都市の平均と類似している、

さらに、72都市のそれぞれと平均値との差から都市ごとの性格を明らかにしており、例えば農林漁業(L)の割合が高い5都市を「農業型都市(L)」と称し、ノイステッティン(都市名)は工業及び手工業(I)が不足しており、公務(O)と交通業・商業(V)は平均程度といった図を用いた検討から、都市ごとの特徴も分析としている<sup>注6)</sup>。また、それらの都市が国土のどこに分布しているかの分析を行っている。

#### 4. まとめ

G.フェーダーは工学者であるが、経済を独学で修得しており、本書の内容は都市の経済学的(産業分類や人口密度)分析が中心となっている。前提条件として2万人の都市を理想とし、実際に2万人が住む都市の詳細な産業構造の分析から、必要な産業規模・面積・従業員数を導き出している。この結果、第2篇の土地利用計画に結びつけたものと考えられる。

これまで第2編における2万人の理想都市の模式図等で示された土地利用計画に気を取られすぎ、それがどのように導き出されてきたかを見逃してきたが、本

Table1. Occupation according to section

H 家事	L 農林漁業	O 公務及び私勤務	V 交通業及び商業	B 無職業生計者	I 工業及び手工業
個人的サービスのための使用人 私教師と家庭教師 幼稚園保育 貨物自動車運転手 料理人 門衛 その他専業使用人 簿記係 速記タイピスト その他の商業使用人 園芸家 家政内生活使用人 家政外生活使用人	農業 園芸業 飼畜業 林業 漁業	行政 防護団 寺院 教化 教育 保健 衛生業 公安公秩良俗維持保安 社会的保護 劇場 映画館 撮影 ラジオ制度 音楽業 職業スポーツ及び見せ物業	売買業とその補助業 銀行、株式市場 と保険業制度 国営郵便局 国営鉄道 交通制度 旅館旅籠業	利子生活者 隠居生活者 満期退職役人と軍人 乳母子守給仕人など 裁判事務に従事する現職 の司法官司補と休職官吏 廃兵と傷害利子生活者 扶助料受領者 救貧院生活者 癡狂院及び類似 の施設居住者 外国学徒 刑務所居住者 無職業者	鉱山業 製造業組織 泥炭採掘業 石材土材に関する工業 冶金業 金属品製造 機械、車両の組立 電気工業業 光学業 製紙業 複写業 揉皮、木材業 楽器業 食料品業 衣服業 建設業 扶養業

稿によって“Die neue Stadt”の再評価ができたものと考えられる。

なお、本書は旧かな使い、旧字、漢字の当て字などもあり、本稿では現代文に改めた。

#### 5. 参考文献

- [1] 刈田喜一郎訳(1942.5)「新都市の建設」, 東京商工会議所(商工調査第79号)
- [2] Gottfried Feder (1939) “Die nene Stadt ; Versuch der Begrueudung einer neuen Stadtplanungskunst aus der sozialen Struktur der Bevoelkerung”, Springer  
出典: <https://archive.org/details/GottfriedFederDieNeueStadt>

#### 6. 注釈

- 例えば日笠端・日端康雄(1993)「都市計画第3版」, 共立出版, P.21
- 日本大学理工学部科学技術史料センターにおける文庫史料の1点
- 刈田喜一郎訳(1942.5)「新都市の建設」, 東京商工会議所(商工調査第79号)
- 都市には定住圏(ジードルンク)を含む
- 頭文字は以下の略

H	Häusliche Dienste	家事
L	Landwirtschsft	農林漁業
O	Öffentliche Dienste	公務
V	Verkehr, Handel	交通業, 商業
B	Beruflose Selbständige	無職業生計者
I	Industrie und Handwerk	工業及び手工業

- それぞれの特徴的な都市数は(H)0, (L)5, (O)7, (V)13, (B)14, (I)25, 平均値に近い(D)9都市と示されている。なお、本都市数の合計は73となるが、理由は不明。